

平成二十二年 入学試験問題

国語

第二回

【注意事項】

- 一、試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- 一、問題は一ページから七ページまでです。
- 一、解答はすべて解答用紙の解答らんに記入してください。
- 一、問いの中で、字数の指示がある場合は、句読点、記号等も字数に含みます。
- 一、解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

たしかに、現代において「死後の世界」を信じる人は、ひと昔前までの人間に比べればはるかに少数派となりました。それというのも、人の死が脳波や心電図など医学によってじつに厳密に把握され、またかつては神や死者の霊たちが住んでいると思われていた雲の上を飛行機が飛び交い、神と同じ視点から人工「エイセイ」が地球を見下ろしている現代となっては、むしろ「トウゼン」のことといえるかもしれません。

ところが、この「死後にも世界はある」という仮定に従って生まれた真理や道徳は、じつは(1)いまま私たちの精神の中に、形を変えて残っているのです。

まずは道徳について、見てみましょう。

死後の世界の存在を唱えるさまざまな宗教や思想は、また必ずといってよいほど、その死者が生前、善い行いをしたか、または悪い行いをしたかによって、死後の世界において天国や極楽に行くか、地獄に落ちるかの審判を受けるといふ仕組みを持っていました。死後の世界は、生きていた世界での出来事や行いとまったく無関係に存在するのではなく、むしろ逆に生きていた世界での行いによって、死後の世界での待遇は雲泥の差、まさに天国と地獄の違いがあるというのが、これまでの「死後の世界」の姿でした。

しかし、なぜこのような「死後の世界」を人類は思い描いたのでしょ(2)うか。

それは、他どの動物たちよりもはるかに、肥大化してしまった人間の欲望を抑制し、社会的・道徳的秩序を形成するためには、この天国と地獄の思想が必要不可欠の過程だったのです。殺人、盗み、暴行、不正……これらの悪を社会的制裁のみで正すことが不可能な時代に、この「死後の世界」での地獄における恐ろしい処罰の数々を説く多くの宗教は、悪の強力な抑止力となったのです。

そして、その★教化が★効を奏して、殺人や盗み、暴行などの不正は、かつての時代に比べれば、はるかに少なくなりました。現代ではたとえ天国や地獄の存在を信じなくとも、自らの欲望のおもむくままに殺人や盗みを行うことはきわめて稀になったのです。それは、法的処罰などの社会的制裁が、かつての地獄の機能を果たしているということはもちろんですが、

天国が「良心」という名をもってそれぞれの人間の内面に宿ったことも、その大きな原因のひとつなのです。

しかしながらこの欲望の抑制、道徳の浸透は、ある種の弊害をも生み出しています。それが、デンマークの哲学者で二十世紀★実存哲学の先駆者といわれるキルケゴールの説いた人間の「平均化・没個性化」ということです。

たしかに、天国と地獄、最後の審判という「死後の世界」像によって、人間のうちに巣くう悪を抑制し、安定した社会的秩序をつくりあげてきたという(3)「コウセキ」はじつに多大です。この死後の世界に「賭けて」きたおかげで、私たちは現代のような道徳的配慮にみちた社会を手にすることができたのです。しかし反面、世界の秩序化、安定化をすすめることは人間の個性や生命力を抑える、つまり「出る(4)を打つ」ということにもなります。魂の不死を(5)「ハイケイ」とした強力な道徳の抑止力は、そのような現代の人間の「平均化・没個性化」という弊害をももたらしているのです。

また科学という現代に大きな影響を与えたものも、じつはこの「死後にも世界がある」という真理に起源をもつものなのです。

たとえば科学者が花を観察するとき、その花が野原の中で風に揺れている姿を見て、愛らしいと思うような、そんな個人的な感情は科学ではまったく参考になりません。科学者はまずその花を地面から引き抜いて実験室に持ち帰り、花びらや「カベン、茎、根などに分解します。そしてそれらをさらに小さな要素へと分解し、光合成や生育など、その化学的仕組みを知ろうとします。科学は、観察という行為からできるだけ人間的行為を消し去ろうとします。

しかし、それはすなわち「生きているものとしての世界」を切り刻み、分解することによって、「死んだ無機質なもの」として扱(6)うことであり、これこそまさに「死んだ後にこそ真実の世界があり、いまこうして生きている姿は仮の姿、偽りの姿である」というかつての多くの宗教や★彼岸思想が求めていたものと同じものなのです。

たしかに、科学の成功は、私たちにさまざまな恩恵をもたらしてくれました。経験を細分化し★数理化し、そして自然を操作したり予測したりすることのできるそのすぐれた能力は私たちの経験範囲を一気に拡大し、そして快適な道具や機械をたくさん生み出してくれました。日常生活において、この科学の成果から受けている恩恵は、はかり知れないものがあります。

しかしまた、この「生命＝自然の否定」を前提とした科学による成果は、私たちの世界にさまざまな危害をも与え始めているのです。

たとえば科学は、人間に有害な化学物質を大量に生み出し、**原水爆**の発明や**環境汚染**、さらに★**遺伝子操作**による★**生態系の破壊**など、じつにさまざまな弊害を人類に、いえ地球全体に対してもたらし始めています。

それも結局は科学が「★**素粒子**の認識さえも、私たちが生きているからこそ、はじめて可能である」という大前提を、忘れているからに他なりません。

科学は、「あるものすべては私たちの生命とは無関係にある」という前提から始まります。それは、すなわち「死後にも世界がある」という大前提につながるものなのです。しかしそのような科学の方法のおかげで、皮肉なことに人類は、環境破壊などさまざまな面から自らの生命を、ひいては地球全体を「死」の危機にさらすことになってしまったのです。

科学というと、たとえば「死後の世界」や「魂の存在」など**旧き迷信**などを打ち破ってきたものと思われがちですが、じつはそれら**彼岸思想**をより**現実化**、**具体化**してきたものが「科学」というべきなのです。

現代とは、まさにそのような世界観に支配された時代なのです。これまでも、(6) という仮定に賭けて生まれ、私たちに恩恵をもたらしてきたものが、こんどは反対に、私たちの生を脅かし、死へと追いやろうとしているのです。

ゆえに私たちはこの現代の世界観、価値観の底流で起きている最も大きな変化、すなわち (7) という仮定から、(8) という仮定へ移行していかなければならないという、この大きな変化に気がつかなければなりません。

(三好由紀彦『はじめの哲学』)

★**肥大化**……大きくなること

★**教化**……思想などを人に教えさすこと

★**効を奏して**……前もってやっておいたことが、うまく効果をあらわして

★**実存哲学**……現代思想の一つ

★**彼岸思想**……仏教で人間の欲や悩みに満ちた世界の向こう側にあると考

えられた世界についての思想

★**数理化**……数などで表わすこと

65

★**遺伝子**……遺伝をおこすものになると考えられている物質

★**生態系**……自然界の生物どうしの関係やそれをとりまく環境をまとめとらえていることば

★**素粒子**……原子よりもさらに小さいつぶ

問一——線(1)「いまも私たちの精神の中に、形を変えて残っているのです。」とありますが、それは具体的にどういうことですか。本文から三十字以上、三十五字以内で抜き出しなさい。(「」などの記号も含み、必ず一マスを用いること)

問二——線(2)「なぜこのような『死後の世界』を人類は思い描いたのでしょうか。」とありますが、筆者はこの問いにどう答えていますか。解答らんに入合うように、本文から二十四字で抜き出しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

二十四字を形成するため。

問三——線(3)「平均化・没個性化」とありますが、それは何をどうすることですか。本文の表現を用いて二十字以内で答えなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問四——線(4)に入れるのにふさわしい語を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 棒 イ 板 ウ 槍 エ 杭

問五——線(5)「じつはこの『死後にも世界がある』という真理に起源をもつものなのです。」とありますが、「科学」が「死後にも世界がある」という真理に起源をもつと筆者が言うのはなぜですか。その理由を九十字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問六

(6) (8) には次のどちらかの表現が入ります。入れるのにふさわしいものを、次のア・イからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア 「死後にも世界はある」
- イ 「死後に世界はない」

問七

——線(ア) (オ)のカタカナを漢字に直しなさい。

問八

本文の内容に合うものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 科学は現在、環境破壊かんきょうはかいなど地球を危機にさらしているが、それのりこえるためには、やはり自然を操作する科学の力が必要である。
- イ 科学は現在、環境破壊など地球を危機にさらしているが、それのりこえるためには、死後の世界を唱えるかつての宗教や思想が必要である。
- ウ 科学は現在、環境破壊など地球を危機にさらしているが、それのりこえるためには、「生命せいめい」自然の否定」という科学の前提を見直す必要がある。
- エ 科学は現在、環境破壊など地球を危機にさらしているが、それのりこえるためには、科学の恩恵おんけいを捨てて生活していくことが必要である。

② 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

「なに物思いにふけっちゃってるの、おまえ」
カズヤの声がしたと思ったら、視界いっぱい、にやついた顔が広がった。おれは思わず身を引いた。

「あれれ、変だなあ、ケイタクん。さては、優希の^{ユウキ}ことを考えてたな？」
「……ユウキって、いったいどのユウキだよ」

おれはうろたえて目をそらした。今日のカズヤはやけにからむ。

「どのユウキだなんて、またまたとほけちゃって」

言いながら、カズヤは教室の後ろにいる女子のグループのほうへ視線をやった。優希を囲んで何やら話はずんでる。この学校へ来て間もないというのに、優希にはもうたくさんの友だちができていようだ。例の占^{うらな}いが、女の子たちに人気があるらしい。

見ていると、⁽¹⁾優希とエリカが奇妙なことをやりはじめた。胸の前あたりで、おたがいの手のひらを合わせている。そしてふたりは目を閉じ、声をそろえて呪文^{じゅもん}のようなものをとなえた。そっと目を開いたエリカが、何かをたしかめるように両手の指をゆつくりと動かす。

「あ……、なんだか指が軽くなった。うまくいくかも」

「うまくいくわよ、絶対。自信を持って」

優希が、はげますように言うのが聞こえた。

「何をやっているんだ、あのふたりは」

おれがあきれてつぶやくと、カズヤは自信ありげに答えた。

「おれが思うに、あれはたぶんピアノがうまく弾けるようになるおまじないだね」

「おまじない？」

「ほら、エリカは今日の新一年生の歓迎会^{かんげいかい}でピアノを弾くだろ。だけどあいつ、これまでの練習で何回も失敗したじゃないか。あがり症^{しやう}なんだよな、エリカって。それで、午後の本番にそなえて、優希におまじないをしてもらっているというわけ」

おれはおどろいた。カズヤがそんなことを知っているという事実^{じじつ}にだ。

「えらく、くわしいじゃないか」

「いや……ほら。同じ教室にいるんだもの、自然と耳に入ってくるじゃん。女子たちの話していることとかさ」

言いわけがましく、カズヤは言った。そりゃあ、少しは聞こえてくるかもしれないけど、そこまで知ろうと思ったら、よほど聞き耳を立てていなければ無理だ。カズヤがいかに優希を気にかけているかがわかる。

「そんなことを気にしているひまがあったら、次の試合のことも考えろよ」

おれが⁽²⁾水をさすと、カズヤは大げさにため息をついた。

「おまえって、ほんとサッカーのことしか頭にないな。もっとほかにも目を向けるよ。世の中は広いんだぜ。試合のことなら、おれだって考えてるさ。今度の相手は、につつき稲山小^{いなやま}だろ」

稲山小は、試合会場に到着したおれたちを見て、「カモが来たぞ」と言ったチームだ。四年のときにやった練習試合は全部負けたのだが、去年の夏に初めて勝った。南小での勇毅^{ユウキ}のデビュー戦だった。体格にものをいわせる相手[★]、ディフェンダーを軽くかわし、勇毅はひとりで三点を決めたのだ。

「弱いと思っていたおれたちに負けて、やつら頭にきているからな。★リベンジに燃えているはずだ。引き締めてかからないと、ひどい目にあうぞ」
おれはカズヤに、というより自分自身に向かつて警告した。

「ところが勇毅はもういない」
カズヤはそう言うとき、芝居^{しばい}がかったしぐさでがつくりとうなだれた。⁽³⁾

「おまじないは聞きたくないと思ってる言葉を、あつさり口にしたカズヤにむしように腹が立った。思わず大きな声が出た。」

「勇毅がいなくなつて……」

自分の声におどろいて、あわてて口を閉じたけれど、おそかった。ざわついていた教室が一瞬^{いっしゆん}しーんとなる。優希がこちらをふり返った。⁽⁴⁾呼ばれたと勘^{かた}ちがいたらしく、自分を指さして「わたし？」という表情をする。

「あつ……ち、ちがう」

急いで首を横に振ったけど、通じていないみたいだ。優希の視線が、おれからカズヤへ移った。なぜだろうと思つてとらを見るとき、カズヤがおれを指さしている。「呼んだのは、こいつです」という意味だ。カズヤめ。

「ちがうんだ」

口に出して、手も振った。だけど教室はふたたびざわざわはじめ、声は優希にとどかない。「えっ？ なあに？」と言いながら、優希はこちらへ近づいてくる。まわりにいた女子たちも、そろっておれのほうを見ている。似たような場面が、始業式の日にもあったのを思い出した。優希がからむ

と、どうしてこういう誤解が生まれてしまうのだろう。

とうとう優希は目の前まで来た。うながすように眉を上げて、おれが用件を言うのを待っている。

「な、なんでもないんだ。今のは、ただ……」

つつかえながら弁解を始めたおれのあとを、カズヤが勝手に続けた。

「ただ、名前を呼んでみたかっただけなんだ」

「カズヤ！」

この裏切り者！あとでひどいからな。肘でカズヤをこづくと、お返しをされた。それならばと背中その後ろから手を回し、後頭部に一発食らわせたら、すかさず膝裏に蹴りを入れられた。そんなおれたちを見て、優希がくすつと笑った。カズヤじゃないけど、笑うとたしかにかわいい。つられておれも頬をゆるめてしまった。もう誤解を解くどころじゃない。

このときとばかりに、カズヤは優希に話しかける。

「さつき、エリカと何をやっていたの？」

すぐに話題が見つかるあたり、さすがにカズヤだ。おれにはとうていまねできない。

「ああ、あれはね、ピアノをミスしないで弾けるおまじないなの」

優希は両手を広げて、鍵盤をたたくまねをした。さつきカズヤが言ったとおりの答えだった。

「へえー。だったらさあ、サッカーの試合に勝てるおまじないなんてのもあるのかなあ？」

思いつくままという感じで、カズヤは話を続けた。べつにそんなものを教えてほしいわけじゃないくせに。ただ優希としゃべっていただけのくせに。

「試合、もうすぐなの？」

ちよつと首をかたむけて、優希はたずねた。

「今度の日曜日なんだけど、相手はすごい強敵で、おれたち負けるかもしれないんだ……」

カズヤは、いかにも試合のことで頭がいっぱいというふうに眉を寄せた。調子のいいやつめ。

「そうなの？ だったら……」

優希は何かを思い出そうとするみたいに、視線を宙に泳がせた。どうやら本気で「おまじない」を教えてくれる気らしい。

95

90

85

80

75

70

65

「いらぬよ！ そんなもの」

おれは思わずどなつてしまった。優希がびつくりしてこつちを見た。目を大きく見開いている。

「そ、そんなものは……いらぬんだ。実力で戦えばいいんだから……」

続きは、もごもごと口の中でつぶやいた。おどろいている優希から顔をそむけ、カズヤのほうを見たら、優希に負けなくらいいぼかんとしている。どうしていいのかわからなくなって、おれは逃げるようにその場を離れた。

「なんだよ、おまえ。いったい、どうしたんだ？」

追ってきたカズヤが不満そうにたずねた。そんなことをきかれても、おれには答えようがない。「おまじないをしてあげるから、わたしと手のひらを合わせて」なんて優希が言ったら、いったいどうする気だったんだよ、なんて言えないじゃないか。

午後になり新入生歓迎会が始まった。カズヤのきげんは悪かった。優希もたぶん怒っているだろう。呼びつけられて、おまじないを教えると言われて、それなのに「そんなもの」は必要ないとつっぱねられて……。怒らないわけがない。

歓迎会は毎年、新一年生が学校に慣れたところを見はからつて行なわれる。各学年が体育館のステージで、いろいろな出し物を見せるのだ。一年生が喜びそうな劇やダンス。テレビ番組をまねたクイズなどもある。六年生の合唱の出番になり、おれたちはステージに上がった。曲は『さんぽ』で、伴奏はエリカだ。

声変わりというやつが近いのか、おれの声はこのごろ出にくくなっていく。急にかすれたりするものだから、歌をうたうのがおっくうでしかたがない。だからいつもは歌っているふりだけして、じつは合唱に加わっていない。だけど今日はちがった。エリカのピアノが始まるのを、おれは息をつめて待っていた。エリカは必ず出だしでつまずく。エリカの指のこわばりが、自分の指にも感じられた。そのとき、おれは緊張しているのが自分だけじゃないことに気づいた。ステージの上にいるだれもが、エリカの成功を祈っている。こんなことは初めてだった。

エリカの前奏が始まった。これまで何度かしくじったところを、ぶじにクリアした。みんなの歌の出だしもそろつた。「やったぜ」という気持ちが伝染したのか、歌声は今までになく力強い。おれも今日は声を出して歌った。なんだか気持ちがいい。歌うのが楽しいと久しぶりに思った。一年生

125

120

115

110

105

100

130

は顔を輝かせて、その曲なら知っているとばかりに、いっしょに歌いはじめた。やっぱり一年生はすなおでかわいい。ついこのあいだまで幼稚園に通っていたんだものなあ。新入生歓迎会なんてつまらない行事だと思いでいたのに、こんなに盛り上がるなんておどろきだ。

曲が終わると、満足げなため息があちこちでもれた。順位を競うコンクールだったわけでもないのに、なぜかみんないっしょうけんめいに歌ってしまっただの。エリカのピアノも完璧だった。

「あと二、三曲いけそうだったよ」

体育館から教室へ引き上げるころ、カズヤのきげんも直っていた。もともとカズヤは、カラオケ好きの親父さんゆずりで、歌うのが大好きなのだ。前を歩くエリカは、何人もの生徒から声をかけられ、そのたびに笑顔を見せている。エリカのとなりには優希がいた。心の中で「さつきはどうもすみません」とあやまると、ふいに優希がふり返った。目をそらすひまもなく、おれは棒立ちになった。優希はにっこり笑うと、すぐに前を向いてしまった。おれは心臓をばくばくさせながら、廊下を遠ざかる彼女の後ろ姿を見送った。

(伊藤遊『ユウキ』)

145

140

135

★デイフェンダー……守備の選手
★リベンジ……やりかえすこと

問一

——線(1)「優希とエリカが奇妙なことをやりはじめた。」とありますが、これは何のためのどのようなことですか。三十字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問二

——線(2)「水」とありますが、これと同じ「水」を使った次の一〜五の慣用句の意味を、後の「意味」ア〜オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- 一 水に流す 二 水をあける 三 水入らず
四 水臭い 五 水を向ける

【意味】

ア 競争相手をぐんとひきはなす

イ よその人が入らず、うちの者だけでいる

ウ 過ぎ去ったもめごとなどをきれいに忘れる

エ 親しい仲なのに他人のような態度をとる

オ 相手が関心を持つように、さそいかける

問三

——線(3)「いちばん聞きたくない」と思っている言葉を、あつさりと口にしたカズヤにむしように腹が立った。」とありますが、どのようなことが「おれ」にとって「いちばん聞きたくない」のですか。三十字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問四

——線(4)「呼ばれたと勘ちがいたらしく、自分を指さして『わたし?』という表情をする。」とありますが、勘ちがいはどのようなことですか。三十五字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問五

——線(5)「な、なんでもないんだ。今のは、ただ……」とありますが、このときの「おれ」の気持ちを説明したもののうち、もっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 優希ユウキのことがとても気になっていたので思わずその名前を叫よんでしまったのだが、冷静になってみると恥はずかしく思う気持ち。

イ 実際は優希のことを話したのではないが、結果的にそのように聞こえてしまったことに気がついてきまりが悪く、あわてている気持ち。

ウ 本当は優希の方から自分の存在に気づいてほしかったのに、待ちきれなくなつて大声で名前を叫んでしまったことを残念に思う気持ち。

エ 隠かくそうとしている自分の失敗をあばくようにカズヤがふるまうので、あわててそれを取り消そうとしている落ち着きのない気持ち。

問六

——線(6)「ももごと口の中でつぶやいた。」とありますが、この時の「おれ」の気持ちを六十五字以内で説明しなさい。(句読点も含くみ、必ず一マスを用いること)

問七

——線(7)「息をつめて」とありますが、これはどのような気持ちを表したのですか。次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 合唱のときに声之急にかすれたりしないかと心配して気が弱くなっている。

イ エリカの伴奏ばんそうが成功するかどうかを心配してはらはらしている。

ウ 優希のおまじないがきかないことがあつてはまずいと緊張きんちやうしている。

エ エリカが無事に伴奏ができるように動作や呼吸を止めようとしている。

問八

本文の内容に合うものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア カズヤは気のいい友達であるが、ひそかにエリカのことを気にかけており、彼女のことをいろいろと調べている。

イ エリカはピアノの伴奏が得意だが気が弱く、カズヤたちにかからかわれることによつて実力が発揮できなくなること恐れている。

ウ 勇毅ユウキはサッカーが得意で得点力のある選手であったが、稲山いなやま小に転校したためにチームの戦力は弱まってしまった。

エ 優希は最近この学校に来たばかりの転校生であるが、人をひきつける魅力みんちりがあり、すでに多くの友達ができている。